

現場で学ぶ生き物調査の基礎

マレーシア国立サバ大学とひとはくの共同事業として、1998年以來17年間15回にわたりマレーシア・サバ州を舞台にボルネオジャングル体験ツアーが開催されてきました。その発展型として今年から始まったのが、公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会(花博記念協会)とひとはくが企画し、生物調査の基礎を現場で体験し学ぶことに力点を置いた新しいプログラム『高校生のための生き物調査体験ツアー in 台湾』です。第一回の様子を交えてこの事業を紹介します。

独自性のある国際連携事業

このプログラムは、国外の豊かな自然の中で、研究者レベルのしっかりした調査手法を体験することが目的で、高校生を対象としたものです。実施場所として候補にあがったのが、ひとはくの研究者と密接な関係がある台北市立動物園です。幸いなことに動物園からの全面的な協力が約束され、宿泊場所や野外実習場所の選定も順調に進みました。さらに台湾の高校生にもこのプログラムに参加してもらうことが台湾側から提案されました。こうして、日本側はひとはくと花博記念協会、台湾側は台北市立動物園と台北動物園保育教育基金



台湾で見た動物たち

左上: スウィンホーキノボリトカゲ (動物園)。
右上: ナナフシの一種 (東眼山)。
左下: 赤い眼が特徴のタイワンアオハブ (東眼山)。
右下: たくさん飛んでいたツマベニチョウ (動物園)。

会、この4者の協力のもとでの実施が決まったのでした。台北市立動物園は低地にあります。動物園から車で片道2時間ほどの距離にある、標高約1000mの東眼山国家森林遊休区が、環境の異なる実施場所としてプログラムに加わりました。

ツアープログラムの特徴

参加者は日本の高校生20名、台湾の高校生18名、日・台合わせて15名の研究者がつとめる講師陣、さらに看護師やボランティアなど8名、総勢61名の大所帯です。7日間の日程中に、バナナトラップによる昆虫調査、ウインクラ装置による土壌微小動物の調査、夜間のライトトラップやカエル・ヘビの観察、吐き戻し法によるキノボリトカゲの食性調査、ハーブトラップを使ったコウモリ調査、コケ植物や花の咲く植物の採集と標本づくりなど、多種多様な生物を対象として調査を実施しました。植物・昆虫・動物の標本の作製方法については、事前学習会、事後学習会でも屋内で詳しく学べるように工夫されています。こうして作られた標本については、毎年2月にひとはくで開催される「共生のひろば」での展示・公開をめざしています。



台湾で見た菌類と植物たち

左上: キノコ的一种アキノタイマツ (東眼山)。
右上: 巨大な葉をつけるクズイモ (動物園)。
左下: 動物園内の湿地。たくさんのトンボが飛んでいます。
右下: 枝から垂れ下がる蘚類キヨスミトゴケ (東眼山)。

台湾での開催の意義

台湾は日本からもっとも近い外国のひとつですから、日本の生物相と共通する点がたくさんあります。それでいて異国であることも実感できる。この二つ

の要素を併せ持つ台湾は最適の場所です。加えて、ご飯がおいしい、治安が良いことも今回訪問先として台湾を選んだ大きな理由でした。

秋山 弘之 (自然・環境評価研究部)



今回のツアーで実施された様々なプログラム

左上: 植物標本をはじめてつくります (東眼山)。上中: ライトトラップ調査 (東眼山)。上右: 野外での講義の様子 (東眼山)。
下左: 吐き戻しによるキノボリトカゲの食性調査 (動物園)。下中: 台湾の生徒と一緒に、今日は外で夕食です (台北市)。
下右: 最後の日の発表会の様子 (動物園)。

台北市立動物園と台北動物園保育教育基金会

台湾台北市の南東にある、敷地面積182haの東アジア最大の動物園です。市内を走る MRT 文湖線終点から歩いてすぐの立地で、毎日多くの来園者で賑わっています。日本統治時代の1914年に設立され、円山動物園の愛称で親しまれていましたが、1986年に現在の木柵地区に移転。一昨年に100周年を迎えた歴史ある施設です。台湾の固有種を多く含む東アジアの動物を中心に飼育・展示するだけでなく、研究と教育にも力を注いでいて、総勢270名の職員が働いています。動物園と連携して活動するのが台北動物園教育基金会です。動物園を利用した教育や普及に関わる様々なプログラムを実施しています。今回の計画も、動物園・基金会との共催

であったことが計画の実現そして成功への鍵でした。
秋山 弘之 (自然・環境評価研究部)



パンダ舎で夜を過ごしている高校生たち